

短信・河口堰

黒部川の清掃

今年も黒部川清掃活動として10月19日(日)に東庄ライオンズクラブ、笹川漁業組合、東庄町、愛釣会、七花会、利根川河口堰管理所などの有志60名が、また、黒部川水源清掃として11月20日(木)に旭市、東庄町、東総広域水道企業団、NPO法人水道千葉、水資源機構(利根川下流総合管理所)の有志43名が集まり、清掃活動に汗を流しました。黒部川および桁沼川の堤防沿いや水辺には投棄された空缶、空ビン、ビニール、廃材などがあり、その回収と可燃物、金属類の不燃物、缶、瓶にゴミ分別を行いました。

当管理所では、黒部川をきれいに・大切にしようと感じて下さる方が増え、ゴミの投棄が減って行くことを目的に、実施されているこのような活動に今後も積極的に参画していきます。



河口堰で確認されたニジマス

虹の魚



河口堰で確認されたニジマス

ニジマスは、北米から1800年代後半に移入した食用の魚であり、釣りの対象となっている魚です。ニジマスは、北の方、北海道などでは定着しましたが、それ以外の日本の地域では定着しにくいと考えられおり、もっぱら釣りの対象として放流している個体が河川に生息していると思われます。ニジマスは、全長40センチ前後が一般的な大きさで、水生昆虫や貝類を捕食する肉食性の魚です。生

息環境は、摂氏12℃以下の冷たい水、流れの速い河川(溪流)などを好みます。繁殖期のオスの体全体に現れる婚姻色は、その名のとおり、虹色の光沢を発し非常に綺麗です。釣り師のあいだでは「レインボートラウト」と呼称され人気の標的となっています。河口堰の魚類調査では、平成20年の秋にニジマスが初めて確認されました。これは、利根川の上流で放流した個体が、河口まで流れ着いたものと考えています。ニジマスは、基本的には陸封型(淡水で一生を過ごす)魚種ですが、海水にも適応できる魚種として知られています。降海型(海へ回遊する)ニジマスは体長1m近くにも成長し、頭部上面が黒く、銀白色の体である「テツ(釣り師のあいだでは「スチール」)」と呼ばれる魚に変身します。

東庄ふれあいまつり

黒部川の水質浄化のための活動を展開している当管理所からも積極的に参加しました。

「第21回東庄ふれあいまつり」は東庄町が毎年行っている祭りで、イベント内容も豊富で今年は昨年倍の1万5千人の方の来場を記録しました。東総用水管理所と利根川河口堰管理所が並んで出展し、両管理所の事業紹介パネルの展示や、認知度、黒部川の水質についてのアンケート(500名)を昨年同様行いました。

黒部川の水についてどう思っているか皆さんの回答をグラフで見ると黒部川の水質は汚いと思っている方が約3割おられ、今後も黒部川の水質浄化のために積極的に活動を展開していかなければと考えています。



東庄ふれあいまつり

生物図鑑



河口堰で確認されたニジマス

息環境は、摂氏12℃以下の冷たい水、流れの速い河川(溪流)などを好みます。繁殖期のオスの体全体に現れる婚姻色は、その名のとおり、虹色の光沢を発し非常に綺麗です。釣り師のあいだでは「レインボートラウト」と呼称され人気の標的となっています。河口堰の魚類調査では、平成20年の秋にニジマスが初めて確認されました。これは、利根川の上流で放流した個体が、河口まで流れ着いたものと考えています。ニジマスは、基本的には陸封型(淡水で一生を過ごす)魚種ですが、海水にも適応できる魚種として知られています。降海型(海へ回遊する)ニジマスは体長1m近くにも成長し、頭部上面が黒く、銀白色の体である「テツ(釣り師のあいだでは「スチール」)」と呼ばれる魚に変身します。

編集後記

今回の河口堰だよりは、今までに掲載してきた「利根川下流沿川紀行」を総集編形式で載せてみました。河口堰だよりが創刊して5年あまり、編集担当も代替わりし、紹介した場所や物語等は51話にもなりました。

私が編集担当になったのが、平成17年6月(第8号)からで、当初は広報誌を作ることが初めてで、何をどうすれば良いのかまったく分からず、大変だった事を思い出します。広報誌と共に、私自身のことも振り返ってみました。

地域を守る潮止堰

河口堰だより

第22号

発行所
独立行政法人 水資源機構
利根川下流総合管理所
利根川河口堰管理所
Tel 0478-86-0477

平成20年12月

利根川河口堰ホームページアドレス
<http://www.water.go.jp/kanto/fonekako/index.html>

河口堰ニュース

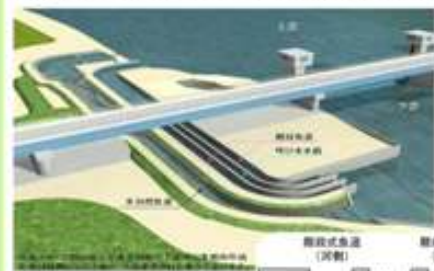
〇魚道改築について

利根川河口堰では、古くなって傷みの著しい右岸魚道の改築を行います。今回はその魚道改築の概要についてお知らせします。

利根川河口堰は、鉄子の河口から18.5kmの感潮区域に位置しており、水道用水などの取水に支障のない範囲で、汽水域を形成する制御を行っています。この周辺には多種多様な魚が往来するので、魚類の遡上・降下ができるように河口堰の左右岸に魚道があります。

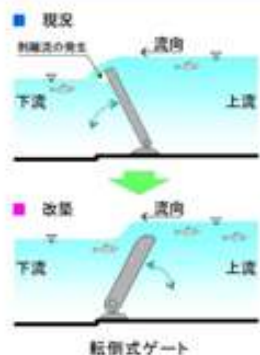
昭和46年に完成した魚道は、長い歳月のなかで老朽化が進んでおり、コンクリートのひび割れや漏水、隔壁の損傷など機能の維持が難しくなっています。また、平成10年以降に、利根川上流域の漁業関係者の方々から、遡上効率を向上する魚道への改築などについての要望もあり、今後も魚道としての機能を十分維持していくため改築を行うこととなりました。改築にあたっては、対象魚をアユとした当時としては最新の設計のものでありましたが、今日の魚道技術の進展により、魚類の遡上効率を向上させることのできる構造としました。

その構造は魚道の中央に呼び水路、その両側に階段式魚道を配置した三連水路としました。また、隣接して多種多様な魚が往来できる魚道(多自然魚道)も新設します。



魚道改築完成イメージ図

三連水路



転倒式ゲート

階段式魚道には、水量を調節する板状のゲートがあり、動力によって転倒する構造としています。ゲートが上流側に転倒すること、丸みを帯びた形状にすることで、滑らかな水流をつくるのが特徴です。



ゲート配置図

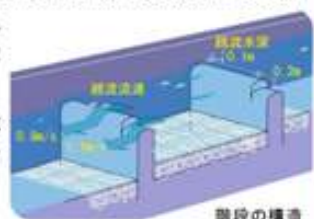
ゲートの配置については、経済性を考慮して、階段式魚道の陸側・河側ともに上流転倒式ゲートを4連としました。

これにより河口堰上流の水位が変動する幅のほぼすべてに追従して、魚道の機能を発揮できる設計としています。

階段式魚道の流速は、アユが階段を乗り越えようとする速度(秒速120cm)以下に設定しています。

呼び水路は、現在の魚道にも魚道外側に暗渠管式とよばれるものを設置していますが、今回の改築では、魚道の中央に配置し、呼び水機能を改善したり、魚道の水深や幅など、最新の知見により設計しています。

改築工事は、平成22年春の完成を予定しています。



階段の構造

利根川下流沿川紀行

創刊号から、執筆載いた「利根川下流沿川紀行」も回を重ね、22号までできました。

この辺りで、掲載した紀行の地を振り返ってみたいと思います。

利根川第一期改修、発祥の地

本格的な治水工事(浚せつ・埋め立て・築堤)が明治中期から後期にかけて、佐原から河口の区間において、外国製の浚せつ船2隻を用いて施工、その土量は約20万8千m³におよんだ。また、その完成から100年目にあたる平成12年に発祥の地に、記念のモニュメントと石碑が建立されている。

鏡子のしょう油

紀州との歴史的な繋がりが深く、鏡子に移住した紀州人がしょう油醸造などを伝えた。

舟運により関東平野で収穫された小麦や豆は鏡子へ、造ったしょう油は江戸へ送り出され、江戸後期には全国一の産地であった。今でも、大手のしょう油会社やNHK連続ドラマ「湾くし」の舞台となった入正しょう油などがある。また、紀州ゆかりの地名や看板が目につき、「臥竜の藤」で有名な妙福寺境内には「紀国人移住碑」がある。

水郷筑波国定公園

昭和2年に新聞社による「日本八景25勝」の選定を機に盛り上がった国定公園の誘致活動において、外輪船の騒し出す旅情や野口雨情の「船頭小唄」で全国的に脚光を浴び、水郷の利根をキャッチフレーズに、八景入りは迷したものの25勝のトップに選定され、昭和11年には佐原の水郷大橋が完成し、徳富蘇峰の書による「水郷之美冠天下」の碑が建立された。その後昭和34年に水郷国定公園を経て現在の「水郷筑波国定公園」となる。現在、この徳富蘇峰の碑は、水生植物園に移設されている。

利根川の舟運

江戸時代のいわゆる「利根川の東遷」と、その完成に伴い利根川を通じた河岸の賑わいと、大小の高瀬船を使った舟運の全盛期からその衰退までの歴史を紹介した。

明治には蒸気船が就航し、鏡子・東京間を結んでいたが、後半には鉄道や道路の開通により、交通の主役は川から岡に変わった。現在は一部に渡し船が残る。

利根川下流域の河童伝説

古くから、河童にまつわる伝承が多く、河童を祀る祠や秘蔵品が多く残っている。鏡子の和田川にある水神社などの「川びたり行事」と、荒野(現鏡子市中央町)の大新河岸船着場に伝わる「河童伝説」。現在は河童親子の銅像のある河童公園と

その近くに河童資料館がある。水郷の新島に伝わる河童「川太郎どん」と、その川太郎が救えたという水草から作った薬(打ち身・捻挫など)の効能と、両国の関取の怪我を治した貼り薬十三枚を紹介。

霞ヶ浦

霞ヶ浦の風物詩となった帆曳船は、出島の折本良平氏がワカサギ漁の様子から帆を利用して網を曳く漁を試行錯誤の末、実現化した。麻生の奥村謙蔵氏が、江戸の佃島で捨てられていた魚を保存食とすべく努力の結果、美味しい煮付けとなり佃煮と名付けた。大杉神社(あんば様)は、関東平野がまだ海であった頃、半島状であった阿波島(あば島)の突端に大きな杉の木がそびえ、航路標識となっていた。疫病が猛威を振っていたこの地で祈祷により治めたという歴史と、悪魔払いなどの守護神として信仰されており、杉の神の化身とされる天狗面もある。

印旛沼伝説

大化の改新以前、印旛沼周辺は印波国造という地域豪族が支配し権勢を誇っており、その墳墓と思われる竜角寺古墳群が印旛沼を望む赤松林に覆われた台地に残る。

印旛沼周辺に伝わる干ばつに喘ぐ村民を救った竜の伝説(竜角寺・竜福寺・竜尾寺の竜にまつわる話)を紹介。

下総町の瓦・煉瓦作り

川の上流から流れ、沼などに堆積した土砂に含まれる粘土などをを用いた瓦作りは奈良時代に始まり、その業跡が滑川小学校付近の土累から発見された。現在も百有余年の歳月に耐え、偉容を誇る犬伏塔灯台の築造にあたっては、瓦と同様に煉瓦も下総で焼かれ、利根川を使って運ばれた。

駒形神社・利根川を詠んだ句碑

平安末期の利根川の大洪水で、村民は食べ物に困り穀神を祀った駒形神社を建立した。その後、五穀大いに実り安心して暮らせるようになったことから、地名を「安食」と改めた。また栄町周辺には、利根川を詠んだ句碑が多く残されており、俳句が盛んな所である高浜虚子などの多くの俳人がこの地を訪れた。

善兵衛渡し跡・松虫寺伝説

成田と印旛を結ぶ渡し船の由来は、幕府に直訴する義民を禁を犯し船を出した善兵衛が捕らわれになるよりはと、沼に身を投じたことによる。奈良時代に聖武天皇の皇女松虫姫が不治の病にかかり、下総萩原の薬師如来の祠に毎日祈り、後に全快したことから、天皇は僧「行基」に七佛薬師を刻ませ寺を建立、この地を松虫と称する。境内には、ゆかりの「御杖の鏡香」と呼ばれる大木や「牛瀧りの池」がある。

牛久沼・文化稲荷神社

牛久沼の名の由来として金竜寺に残る言い伝えでは、忽け

者の小僧が終いには牛になってしまい、我が身を恥じて沼に飛び込み沈んだことから牛を喰った沼からという。文化稲荷神社には数多くの伝説が伝わっており、中でも有名な「白狐報恩」は狐頭に撃たれそうになった狐を助けたところ、女に化け恩返しにきたというもので、この神社の由来にもなっている。

神崎の森と神崎神社・滑川観音(龍正院)

舟運の盛んな頃、利根川沿いの小高い丘の神崎の森は、川が急な曲がりとなっており、航行する舟人はこの森を目印としていた。社殿右には国指定の天然記念物のクスノキ(実際はひこばえ)があり、この木の伝説に水戸黄門が神社参拝時にナンジャモンジャと名付けたといわれる。また滑川観音(龍正院)には、板東二十八番札所の祖は、慈覚大師によるとの事で、国指定の重要文化財の仁王門をめぐり正面の入母屋造りの五間堂の本堂は、雄大さを誇り県指定の有形文化財に指定されている。

旧佐原中心街・伊能忠敬・佐原の大祭

江戸中期から利根川の舟運により、江戸との結びつきが深かった佐原の町並みは、今でも瓦葺き屋根の蔵造りの家が並び、出しといわれる船着場が、小野川沿いに残っている。また、小野川沿いには日本で初めて正確な日本地図を完成させる偉業を成し遂げた伊能忠敬の屋敷も残る。この他に佐原には、大きな江戸人形を載せた総ヶヤキ作りの山車14台が運行する諏訪神社の秋大祭は関東では最大規模のものである。

東国三社(鹿島神宮・香取神宮・息栖神社)・武妻稲大神と経津主大神

香取の海の頃、東国三社は「お伊勢参りの後の三社参り」と呼ばれ、多くの観光客で賑わっていた。鹿島神宮は、神武天皇の東征のおり跡地にたたかされているところを武妻稲大神の師霊剣(ふるみたまのつるぎ)に救われ感謝し即位のおり勅祭されたと伝えられている。香取神宮は、舟運盛んな頃津宮河岸と呼ばれ、常夜灯が灯され、舟の往來の目印となっていた。

息栖神社には、香取の海であった頃から清水が湧き出る女瓶・男瓶が水中にあり、潮の中から真水が出ることから忍潮井(おしおい)と名付けられた。また、鹿島の武妻稲大神と香取の経津主大神は天照大神のご神意に奉じ国内を巡り荒ぶる神々を平定、平和国家の建設に偉大な神威をあらわされたことにより、神宮の称号が与えられたとされている。

利根川下流域舟運・木下河岸(茶船)・小堀河岸

江戸時代、舟運が盛んでしょう油や地方名産は鏡子・松岸の両河岸などから各河岸を中継し江戸へ運ばれた。また、遠く東北地方から届く荷は、危険な航路を避け、那珂川河口の瀬沼に入り海老沢河岸で荷を下ろし、鉢田河岸まで人馬で陸路を運び、土浦から大型の高瀬舟で利根川を通り、江戸へと向かっ

た。その後、鏡子開港がなされ、明治12年には蒸気船が利根川に就航した。木下茶船は、水郷地帯の風光明媚な景色を観光したり、三社を巡拝したりする人々のため利根川を上下する遊覧船をいい、年間約4,350隻が利用していたと言われている。この地の由来は、木をおろしたりしたことによる。小堀河岸は、我孫子の利根川沿いの古利根川跡にあり、川が大きく曲がっており小高い台地が風よけに最適な場所で、鏡子から江戸に向かう高瀬舟の泊地として、また浅瀬になることから幹下船への荷の積み替え河岸でもあった。

街道を見守る十三の石仏道標

江戸時代、鏡子の飯沼観世音(圓福寺)の住職・真永法師が願主となり、山門中央から下総の滑河観世音(龍正院)仁王門までの一里ごとに十三の石仏を刻み建立した現在と異なり道標が旅人や近郷近在の人達に無限の安らぎを運んだことは想像に難しくない。石仏道標は、長い年月の間に埋没されていたものや新造したもの盗難にあったものがあり、すべてがその地に存在しないが、「先人の崇高な意願と豊かな英知とを秘めた貴重な遺産である。」と執筆願った福本氏は結んでいる。

間宮林蔵生家と記念館

記念館では、江戸時代に全国を測量し日本地図を初めて作成した間宮林蔵の生を受けてから、名を世に知らしめた間宮海峡の発見までの軌跡を知ることが出来、親交のあった人々のなかには佐原の伊能忠敬の名がある。また、世に出るきっかけとなった岡塚の付近には林蔵の像と祈念碑が建っている。

平将門伝説及び史跡・国王神社・岩井の井戸・富士見の馬場・九重の桜・延命院・延命寺

平将門は平安時代中期に現在の佐倉近在に生まれ、38才で生涯を閉じるまでに幾多の逸話を残している。家督相続の争いに端を発した「承平の乱」で平一族を巻き込み「天慶の乱」へと続く。この戦いで敗れた将門は島田山の石井宮所で社絶な最期を迎える。将門の死後、強力な武士団が各地に興り、武士の時代へと移行していく。将門の三女如蔵尼が宮んだ庵に始まりとされる「国王神社」は、茅葺屋根権現造り社殿で、持蓮佛であったという弘法大師の作とされる薬師如来は島の薬師「延命寺」に、他にも将門ゆかりの地が広範囲に多数残る。

「桔梗塚」は、将門の愛妾の桔梗御前の墓で将門が討たれた事を知り、逃げる途中で殺された所とされている。「海神寺」の縁起によると妙見菩薩の加護により関東八州を制し相馬郡に居城を構え平の親王と称し…境内には将門と7人の影武者とされる供養塔(石碑)がある。「将門の井戸」承平年間に将門が開き、軍用にも使用したと伝えられる。